マリー・ローランサンとモード

Marie LAURENCIN et la mode

1920年代パリ——

輝いた女性たち

ココ・シャネル、

ジャンヌ・ランバン

2023 6.24(土)▶9.3(日) 名古屋市美術館

マリー・ローランサン《ニコル・グルーと二人の娘、ブノワットとマリオン》
1922年 油彩／キャンヴァス マリー・ローランサン美術館 © Musée Marie Laurencin

企　画　趣　旨

マリー・ローランサンを再発見する
――1920 年代パリ、アートとファッションの交差

ふたつの世界大戦に挟まれた 1920 年代のパリ。それは様々な才能がジャンルを超えて交錯し、類まれな果実を生み出した、奇跡のような空間でした。ともに 1883 年に生まれたマリー・ローランサンとココ・シャネルの二人は、その自由な時代を生きる女性たちの代表ともいえる存在です。パステルカラーの優美な女性像で人気を博したローランサンと、男性服の素材やスポーツウェアを女性服に取り入れたシャネル。本展では二人の活躍を軸に、ポール・ポワレ、ジャン・コクトー、マン・レイ、ジャンヌ・ランバンなど、時代を彩った人々との関係にも触れながら、美術とファッションがそれぞれの境界を越えてダイナミックに展開していく様子を辿ります。オランジュリー美術館やポンピドゥー・センター、マリー・ローランサン美術館など国内外のコレクションから、約 90 点の出品作品でご紹介します。

セシル・ビートン
《お気に入りのドレスでポーズをとるローランサン》
1928 年頃
マリー・ローランサン美術館　© Musée Marie Laurencin

マリー・ローランサン

パリ生まれ。ピカソやブラックとの交流から、初期にはキュビスムの影響が色濃い作風であったが、後にパステル調の淡い色調と優美なフォルムが特徴の作風に。絵画制作のみならず、舞台美術や室内装飾、本の挿絵も手がけた。

マリー・ローランサン
《わたしの肖像》
1924 年　油彩／キャンヴァス
マリー・ローランサン美術館　© Musée Marie Laurencin

展覧会のみどころ

●マリー・ローランサンを再発見する

画家としてのみならず舞台美術家や室内装飾家としても活躍し、時代を切り拓いた女性、マリー・ローランサンの魅力を、生誕 140 年を機にご紹介します。

●1910～1930 年代のファッションを紐解く

ローランサンと同じ年に生まれたココ・シャネルの軌跡を中心に、「モダンガール」の登場とパリ社交界のファッションの展開をたどります。

●ローランサンの色彩を蘇らせたシャネルのコレクション

デザイナー、カール・ラガーフェルドがローランサンの色彩から着想を得て発表したコレクションのなかから、シャネルのスーツが来日します。

展　示　構　成

第 1 章　レザネ・フォルのパリ

奇しくも 1883 年という同じ年に生まれたマリー・ローランサンとココ・シャネル。美術とファッションという異なる分野に身を置きながら、互いに独自のスタイルを貫いた二人は、「レザネ・フォル（狂騒の時代）」と呼ばれた 1920 年代のパリを象徴する存在でした。

女性的な美をひたすら追求し、社交界の女性たちを繊細優美に描いた肖像画で、瞬く間に人気画家に駆け上がったローランサン。一方、シャネルの服を身にまとうことは、ひとつのステータス・シンボルとなっていきました。

ローランサンが 1923 年に描いた《マドモアゼル・シャネルの肖像》は、似ていないからとモデルに受け取りを拒否された作品として知られています。シャネルは男性ファッションの考えを取り入れ、シンプルな形態を特徴とした機能的なファッションを提案しました。ローランサンらしい甘美な女性像は、彼女のイメージにふさわしくないと感じられたのかもしれません。

ローランサンが描く、パリ社交界の女性たち

マリー・ローランサン
《黒いマンテラをかぶったグールゴー男爵夫人の肖像》
1923 年頃　油彩/キャンヴァス　パリ、ポンピドゥー・センター
Photo © Centre Pompidou, MNAM-CCI, Dist. RMN-Grand Palais / image Centre Pompidou, MNAM-CCI / distributed by AMF

マリー・ローランサン
《ピンクのコートを着たグールゴー男爵夫人の肖像》
1923 年頃　油彩/キャンヴァス　パリ、ポンピドゥー・センター
Photo © Centre Pompidou, MNAM-CCI, Dist. RMN-Grand Palais / image Centre Pompidou, MNAM-CCI / distributed by AMF

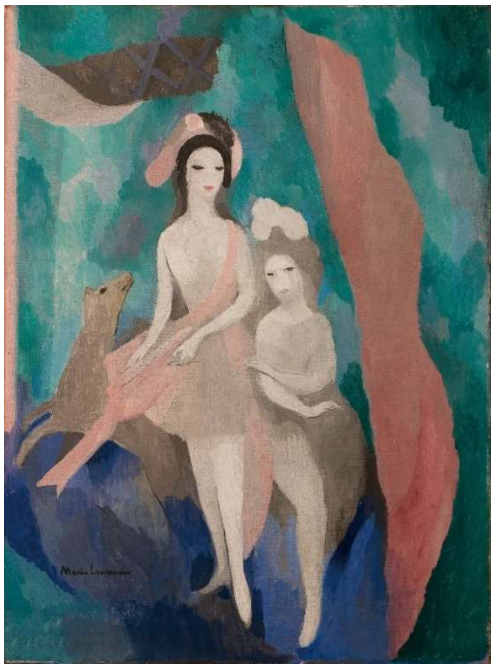
マリー・ローランサン
《ヴァランティーヌ・テシエの肖像》
1933 年　油彩／キャンヴァス　ポーラ美術館

マリー・ローランサン
《マドモアゼル・シャネルの肖像》
1923 年　油彩/キャンヴァス　オランジュリー美術館
Photo © RMN-Grand Palais (musée de l'Orangerie) / Hervé Lewandowski / distributed by AMF

第２章　越境するアート

1920 年代のパリは、スペインからパブロ・ピカソ、アメリカからはマン・レイなど、国境を超えて集まった多くの若者たちがパリで才能を開花させた時代でした。そして美術、音楽、文学、ファッションなど、別々の発展を遂げてきた表現が垣根を超えて手を取り合い、「バレエ・リュス」などに代表される新たな総合芸術が活発になります。ローランサンとシャネルも、その活動に参加することで表現の幅を広げ、新たな人脈を形成する糸口をつかみました。ジャン・コクトーなど、前衛と社交界を繋ぐ人物の存在もカギとなります。工芸や染色、ファッションなどの装飾美術が芸術的地位を高めたのもこの頃のこと。ローランサンもまたこの分野におけるキーパーソンでした。

舞台美術と室内装飾の世界―バレエ・リュスとアール・デコ博



マリー・ローランサン
《牝鹿と二人の女》
1923 年　油彩／キャンヴァス　ひろしま美術館

マリー・ローランサン
《鳩と花》
1935 年頃　油彩／キャンヴァス（タペストリーの下絵）
マリー・ローランサン美術館　© Musée Marie Laurencin

第３章　モダンガールの登場

第一次世界大戦を契機とした女性の社会進出、都市に花開いた大衆文化、消費文化を背景に、短髪のヘアスタイルにストレートなシルエットのドレスをまとった女性が街を闊歩しました。彼女たちは“モダンガール”と呼ばれ、世界的な現象となります。ポール・ポワレによるコルセットからの解放、ココ・シャネルのリトル・ブラック・ドレスの発表を経て、さらにジャンヌ・ランバンを始め多くのデザイナーたちが競ってモダン・ファッションに取り組み、女性服は大きく変化を遂げたのです。

シャネルの軌跡と 1910-1930 年代のファッションを紐解く

ガブリエル・シャネル
《帽子》
1910 年代　神戸ファッション美術館

ガブリエル・シャネル
《デイ・ドレス》
1927 年頃　神戸ファッション美術館

ポール・ポワレ
《カフタン・コート「イスファハン」》
1908 年　島根県立石見美術館

ジャンヌ・ランバン
《ドレス》
1936 年　島根県立石見美術館

マリー・ローランサン《ばらの女》
1930 年　油彩／キャンヴァス
マリー・ローランサン美術館　© Musée Marie Laurencin

マリー・ローランサン
《羽根飾りの帽子の女、あるいはティリア、あるいはタニア》
1924 年　油彩/キャンヴァス
マリー・ローランサン美術館　© Musée Marie Laurencin

エピローグ　よみがえるモード

1983年から30年以上にわたり、メゾン・シャネルのアーティスティック・ディレクターを務めたカール・ラガーフェルド（1933-2019）。ローランサンの色彩から着想を得て、コレクションを発表しました。ローランサンとシャネルの二人が、百年近い時を経て新たなモードの中で見事に融合したのです。

カール・ラガーフェルド、シャネル
ピンクのツィードのスリーピース・スーツ、刺繍が施された襟元とベルト
2011年春夏　オートクチュール　コレクションより
2011年　パリ、パトリモアンヌ・シャネル
© CHANEL / Photo Antoine Dumont

マリー・ローランサン
《ニコル・グルーと二人の娘、ブノワットとマリオン》
1922年　油彩／キャンヴァス
マリー・ローランサン美術館　© Musée Marie Laurencin

開　催　概　要

展覧会名　マリー・ローランサンとモード

会　　期　2023年6月24日（土）～9月3日（日）【63日間】

開館時間：午前9時30分～午後5時、8月11日を除く金曜日は午後8時まで

（いずれも入場は閉館の30分前まで）

休 館 日：月曜日（7月17日、8月14日は開館）7月18日（火）

会　　場　名古屋市美術館

〒460-0008　名古屋市中区栄2-17-25〔芸術と科学の杜・白川公園内〕

TEL：052-212-0001　FAX：052-212-0005

主　　催　名古屋市教育委員会・名古屋市美術館、中京テレビ放送

協　　力　ヤマト運輸、名古屋市交通局

後　　援　在日フランス大使館 / アンスティチュ・フランセ日本、名古屋市立小中学校PTA協議会

企画協力　美術デザイン研究所

観 覧 料　一般1,800円（1,600円）、高大生1,000円（800円）、中学生以下無料

（　）内は、前売・団体料金

展覧会公式ホームページ　https://www.ctv.co.jp/marie-laurencin-nagoya/

関連催事　解説会

① 7月8日（土）14:00～15:00（開場13:30）

② 7月23日（日）14:00～15:00（開場13:30）

③ 8月18日（金）18:00～19:00（開場17:30）

講師：勝田琴絵（名古屋市美術館学芸員）［①③］

深谷克典（名古屋市美術館参与）［②］

会場：名古屋市美術館2階講堂

定員：120名（当日先着順、30分前に開場し定員になり次第締め切り）

※入場無料。ただし聴講には展覧会観覧券（観覧済みの半券も可）が必要

特別展「マリー・ローランサンとモード」広報用画像の提供について

特別展「マリー・ローランサンとモード」をご紹介いただく際の広報用画像を提供いたします。下記注意事項をご確認の上、専用フォームにより申請してください。

広報用画像提供依頼専用フォームはこちら→https://logoform.jp/form/mX9C/253317

●展覧会をご紹介いただく場合

・本展をご紹介いただく場合、記事・番組内容について、情報確認のため、原稿を下記問い合わせ先までメールにてお送りくださいますようお願いします。

・概要などの確認のため、ゲラ刷り・原稿の段階で校正をお送りいただきますようお願いします。お送りいただけない場合、掲載内容についての責任は当方では負いかねます。

・掲載・放送後は、掲載紙・誌、または同録DVDを1部お送りくださいますようお願いします。WEBサイトの場合は、掲載時にURLをお知らせください。

●画像掲載について

・画像を使用する場合は以下の点にご留意いただきますようお願いします。

－画像の使用は本展を紹介する場合に限らせていただきます。展覧会終了後の放送・掲載は原則としてお断りします。また、本展会期中であっても、再放送や転載をされる場合は、広報担当へご連絡ください。

－ご使用の際は、展覧会名、会期、会場名、《作品名》、制作年、所蔵先及びクレジットを必ずご記載ください。作品名については《 》をつけて表記いただきますようお願いします。

－画像はすべて全図で使用してください。トリミング、縦横比の変更、文字や他のイメージを重ねることはできません。

－WEBでご紹介いただく場合は、画像を72dpi以内に設定のうえ、コピーガードを施しご利用ください。

－雑誌の表紙などに使用される場合は、事前にご相談ください。

・以上の点にご留意いただけない場合、所有者などとの間にトラブルが生じることがあります。その場合、主催者側では一切責任を負いかねますのでご注意ください。

・画像は原則データでの送付とさせていただきます。必ずメールアドレスをご記載ください。

●読者プレゼントのご提供について

・本展をご紹介いただく際に、ご希望があれば、本展観覧券を貴媒体の読者にプレゼントします(5組10名様まで)。専用フォームにてお申し込みください。

●展覧会の取材・撮影について

本展の取材・撮影をご希望の場合は事前にご連絡ください。ご連絡がない場合、お断りすることがあります。

【広報に関するお問い合わせ】

名古屋市美術館（広報担当：小出）

〒460-0008　名古屋市中区栄 2-17-25　　TEL：052-212-0001　FAX：052-212-0005

メール：y.koide.11@city.nagoya.lg.jp

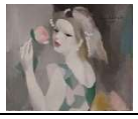
展覧会紹介文例

【50 文字程度】
ローランサンの多彩な活動を軸に、1920 年代のパリで美術とファッションが境界を越えて展開していく様子をたどります。

【100 文字程度】
本展では、ともに 1883 年に生まれたマリー・ローランサンとココ・シャネルの二人の活躍を軸に、華やかで自由な雰囲気の 1920 年代のパリで、美術とファッションが互いの境界を越えてダイナミックに展開していく様子をたどります。

【200 文字程度】
二つの世界大戦に挟まれた 1920 年代のパリ。その自由な時代を生きる女性たちの代表ともいえる存在が、画家のマリー・ローランサンと、ファッション・デザイナーのココ・シャネルです。本展では、ともに 1883 年に生まれた二人の活躍を軸に、ポール・ポワレ、ジャン・コクトー、マン・レイ、ジャンヌ・ランバンなど、時代を彩った人々との関係にも触れながら、美術とファッションが互いの境界を越えてダイナミックに展開する様子をたどります。

特別展「マリー・ローランサンとモード」 広報用画像一覧

No.	作品画像	クレジット
1		セシル・ビートン 《お気に入りのドレスでポーズをとるローランサン》 1928 年頃 マリー・ローランサン美術館 © Musée Marie Laurencin
2		マリー・ローランサン《わたしの肖像》 1924 年 油彩／キャンヴァス マリー・ローランサン美術館 © Musée Marie Laurencin
3		マリー・ローランサン 《ヴァランティーヌ・テシエの肖像》 1933 年 油彩／キャンヴァス ポーラ美術館
4		マリー・ローランサン 《牝鹿と二人の女》 1923 年 油彩／キャンヴァス ひろしま美術館
5		マリー・ローランサン 《鳩と花》 1935 年頃 油彩／キャンヴァス（タペストリーの下絵） マリー・ローランサン美術館 © Musée Marie Laurencin
6		ガブリエル・シャネル 《帽子》 1910 年代 神戸ファッション美術館
7		ガブリエル・シャネル 《デイ・ドレス》 1927 年頃 神戸ファッション美術館
8		ポール・ポワレ 《カフタン・コート「イスファハン」》 1908 年 島根県立石見美術館
9		ジャンヌ・ランバン 《ドレス》 1936 年 島根県立石見美術館
10		マリー・ローランサン《ばらの女》 1930 年 油彩／キャンヴァス マリー・ローランサン美術館 © Musée Marie Laurencin
11		マリー・ローランサン《 羽根飾りの帽子の女、あるいはティリア、あるいはタニア》 1924 年 油彩／キャンヴァス マリー・ローランサン美術館 © Musée Marie Laurencin
12		マリー・ローランサン 《ニコル・グルーと二人の娘、ブノワットとマリオン》 1922 年 油彩／キャンヴァス マリー・ローランサン美術館 © Musée Marie Laurencin
13 正方形 14 縦 長		
15	展覧会ロゴ	